

ジョナス・ハンウェイの 『紅茶論』をめぐる歴史的考察

—ある慈善活動家の二面性—

加藤 弘 嗣

Synopsis: Jonas Hanway's *An Essay on Tea* was published as an appendix to his *A Journal of Eight Days Journey* in 1756. While tea had spread into the British people with its benefits recognized to a certain extent, this addendum to *A Journal* attracted public attentions for its anachronistic denigration of their favorite drink, especially from one of its devotees, Samuel Johnson. Johnson, while deliberating carefully Hanway's *Essay* for his refutations, took little notice of *A Journal*, which should have been worthy of his attention as a main work to its supplement. And such a disregard for *A Journal* typifies public responses to this main volume. This thesis, however, makes it a point to give due regard to *A Journal*, which would foreground Hanway's amiable disposition as a devout Christian; for focusing only on *An Essay* primarily based on his aspects of mercantilist would make it difficult to understand why his philanthropy should have been characterized as Christian mercantilism.

序 論

「海員協会 (Marine Society)」の創設者であるジョナス・ハンウェイ (Jonas Hanway) (1712-86) は、「マグダレン感化院 (Magdalen Hospital)」や「捨て子養育院 (Foundling Hospital)」など種々の慈善事業に精力的に関与し、18世紀後半の30年余りロンドンにおいて彼が寄与しなかった慈善事業はほぼ皆無であったとも評される、まさに「慈善活動の黄金期」と呼ばれた時代の象徴的人物である (J. S. Taylor, *Jonas Hanway* xiii; Rodgers 3)。ハンウェイは「愛国主義」と「信仰心」を「原動力」としながら慈善活動に勤しむが、そんな彼が著した『サウサンプトン、ウィルトシャー経由のポーツマスからキングストン・アボン・テムズまでの8日間の

旅日誌』(*A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames, 1756*)が1756年に刊行される(Rodgers 36)。またその補遺という名目で別巻として『紅茶論』(*An Essay on Tea, 1756*)も同時に出版される。その年11月の『リテラリー・マガジン』(*the Literary Magazine*)でこの2冊について論評したサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)は、本巻の『旅日誌』については、わずか8日間の漫遊からなぜこのような大著が生まれたのかと疑問を呈し、ハンウェイの見聞による記録はごく一部分であり、大半が旅をせずとも書けるようなその内容についても脱線に次ぐ脱線で、全く論評に値しないとの見解を示す(*Literary Magazine* 335)。一方紅茶に対する「悪口雑言」である別巻に関しては、紅茶の功罪をめぐる議論の叩き台としての価値を認め、論考の一部を抜粋という格好で論評を加えないまま紹介する(Johnson, *Literary Magazine* 335)。その後1757年に出版された『紅茶論』の第2版への『リテラリー・マガジン』における評論でジョンソンは、「紅茶の消費」が英国の「利益に有害である」ことを主張する試みに対し、20年間紅茶を愛飲し続ける「常習的で厚顔の紅茶愛好者」として紅茶擁護論を繰り広げる(*Major Works* 509)。ただし今回は『旅日誌』の第2版については一切言及しないことになる。ハンウェイの下で研鑽を積み彼の評伝を著したジョン・ピュー(John Pugh)も、1757年の第2版出版に関する逸話において、『紅茶論』を取り上げ、ジョンソンからの恩師への個人攻撃の「皮肉」や「悪意」に憤慨しているが、『旅日誌』の内容には全く触れていない(149-50)。しかし本稿ではハンウェイの『紅茶論』について考察するに当たり、黙殺に近い形で扱われた彼の『旅日誌』を議論の拠り所の一つとしたい。というのは、なぜハンウェイの慈善活動の理念が「キリスト教的重商主義(Christian mercantilism)」と称されるのか、「愛国主義」の立場から紅茶の害を糾弾する『紅茶論』のみでは捉え難く、彼の慈善活動の「原動力」である「信仰心」の側面は『旅日誌』により感得されることになるからである(J. S. Taylor, *Philanthropy* 288; Rodgers 36)。

I：宗教的随筆としての『旅日誌』

1754年の夏、ポーツマス（Portsmouth）で所用を済ませたハンウェイは、ロンドンへの帰途、イングランド南部を周遊する。ポーツマス（Portsmouth）からハンプシャー州（Hampshire）の沿岸をサウサンプトン（Southampton）まで小型帆船で航行し、その後は馬車で、ウィルトシャー州（Wiltshire）、ドーセット州（Dorset）、ハンプシャー州（Hampshire）、そしてサリー州（Surrey）を回遊した後、キングストン・アポン・テムズ（Kingston upon Thames）に至る8日間の行程である（Everett 42-43）。この旅行の備忘録が『旅日誌』にまとめられるが、それは、周遊を共にした二人の婦人にそれぞれ宛てた手紙から成る書簡集という体裁をとる。その中でハンウェイは、来訪地の名所や旧跡に関して通り一遍ながら見聞を披露しつつ、旅の途上で漫然と心に浮かんだ関心事について持論を展開する（Everett 43）。女子修道院、演劇、墓石、教会音楽、節制、抱き犬、結婚、早起きの得、魂の不滅、そして女性の会話の効用などと「数えきれない題材」について漫然とした形の随想が繰り返り広げられ、その一貫性を欠く内容について言えば、英国の貿易商社「ロシア商会（Russia Company）」の社員時代のペルシャへの旅行記でもある『カスピ海における英国交易の歴史的叙述』（*An Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*, 1753）で得た名声を全てハンウェイは英国国内の旅行で失ったようなものとまで揶揄されるほどであった（Rodgers 61）。

ハンウェイ自身も、一つの話題が完結を待たずに次々と転変する彼の書簡集の性格に関し、「多様性」と突然の「転換」という言葉により集約している（*Journal* 244-45）。しかしこの特徴を彼が「不合理なもの」でないと考えるのは、それらを「当世風の会話」に擬え、また各手紙の切れ目をいわば談話中の休止のようなものと捉えているからである（Hanway, *Journal* 244-45）。しかもハンウェイはこの談話に擬えられる『旅日誌』において、「陽気なもの（the gay）」である現世をめぐる話題と「厳粛なもの（the se-

rious)」である来世にまつわる熟考の間を「非常に老練な廷臣」の気ままさと気軽さで往来するという (*Journal* 143)。例えばある朝、ウィルトシャーとハンプシャーの州境あたりを進み、ハンウェイは澄み渡った空、そよ風、そして様々な姿を見せる緑の大地について詩的描写を試みる (*Journal* 199)。しかし突如として彼の「想像力」は、「天地万物」の「偉大なる統治者」の「全能」、また有為転変するこの世における不変の神の「慈愛」や「恩恵」に向けられる (*Hanway, Journal* 199, 201)。ハンウェイによれば、それらは人知の及ばない世界である「永遠の未来 (eternity)」においても変わらず、この世の人生は、「詩人たちの最も豊かな想像力」また「熾天使のような愛で燃え滾る心」でもごくわずかに不完全な形でしか思い描けない世界、つまり「あの至福の地 (that elysium)」に至る旅の道中に過ぎないという (*Journal* 201-202)。こうした主張は、「現世での喜び」がどのようなものであれ、そうした幸福は大方「より素晴らしい」ものへの希望より生じるものであるという、ハンウェイの信念に基づくものであるが、このような彼の宗教的信条は、8日間のイングランド南部を巡る旅行のハイライトの一つである、ソールズベリー (Salisbury) 近郊の先史時代、具体的に言えば、新石器時代より青銅器時代の遺跡ストーンヘンジ (Stonehenge) をめぐる随想において顕著となる (*Journal* 143)。

ハンウェイによれば、当時この巨石群の建立は紀元前 500 年頃と考えられていたようだが、ストーンヘンジを古代ケルトの宗教的遺跡と誤認する彼は、この「ドルイド教信者たちのセントポール大聖堂」について宗教や歴史また建築上の観点から種々の解説を試みる (*Journal* 168)。そしてハンウェイは、ストーンヘンジの時代より 18 世紀半ばまでの歴史について、その間に起きた「ローマ帝国の衰退」や「ペルシャ王国の崩壊」、また様々な国家や都市の壊滅に思いを馳せる (*Journal* 168-69)。このような形で世のはかなさを説くハンウェイは、唐突にもこの 2250 年以上の間に生じた死者、彼にいわせれば、「草葉の陰 (the regions beyond the grave)」の住人として「採用された (recruited)」人の数について概算を試みる (*Journal* 169)。その数は当時の世界人口として推定される 4 億の 225 倍になるとい

うが、この数字は、先ず前提として紀元前 500 年より人口動向が一定不変であるとの仮定に基づき、さらに人間の平均余命を 17 年とするデータを 10 年に修正した上で導き出された、2250 年間の死者数 900 億を根拠とするものである (Hanway, *Journal* 169)。

たしかにあの世の人口などという、このような奇抜な発想に関し、ハンウェイ自身もこうした推察を「不自然な考察 (far-fetched reflection)」と認めている (*Journal* 169)。しかしその理由はといえば、この世での「人生」をほんの「瞬時 (a moment)」と見做し「自身にとっての無限の重要性」である「魂の不滅」を信じる彼が抱く、神の恩寵により「未来永劫」の幸福を享受する来世の「無数の聖なる魂」への憧憬に由来するらしいのだ (Hanway, *Journal* 169-70)。こうした来世での「永遠の至福」を「最大の希望の綱」とする宗教観に基づき、ハンウェイは、神への「信仰心 (religion)」の「日々の営み」の「最優先事項 (prime object)」としての位置づけや、その実践例として「富みへの盲目的信仰」や「虚栄への煩惱」を導く「この世の豪華絢爛」に対する「無頓着」について説くこととなる (*Journal* 143, 297)。このような形で『旅日誌』においてハンウェイは、この「宗教的随筆」で彼の自負する「聖職者の役 (the office of a priest)」を果たすのだ (*Journal* 315)。

しかしハンウェイは別巻の『紅茶論』において、「魂の不滅」を信じ現世への「無頓着」を主張する、この聖職者の姿とは異質な一面を見せることになる (*Journal* 169)。そこではストーンヘンジにまつわる随想で宗教観を説くために援用された人口という概念が重要な鍵として持ち出され、重商主義的な国家観が展開される。まさにこれは『旅日誌』でハンウェイが自認する話題の唐突な「転換」といえようが、ただし別巻の『紅茶論』に向けてこの転換は、『旅日誌』で散見される現世から来世とは逆のベクトルを伴う形で生じることになるといえようか (*Journal* 245)。ともあれその『紅茶論』について議論する前に、次節では、一年間で 2000 人あまりの死者をもたらす「遅効性の毒」とハンウェイが評する紅茶が当時どのように受容されていたか、18 世紀前半の紅茶論争を代表するトーマス・ショート (Thomas

Short) の見解と彼の主張に異議を唱えたサイモン・メイソン (Simon Ma-
son) の言説を中心に確認しておきたい (*Essay* 74)。

II：紅茶の受容とその毀誉褒貶

18世紀への変わり目において異国の飲み物といえはコーヒーであり、
コーヒーの消費はおよそ紅茶の10倍であったが、1730年までに逆転現象
が起り、その後18世紀を通じて紅茶はコーヒーを凌駕し続けることにな
る (Rappaport 48)¹。とはいえ「異国の見慣れない産物」であった紅茶は、
「容易に入手可能」な飲み物として定着しながらも、18世紀初頭の数十年は
まだその評価が定まらず、この「不可解な」飲み物をめぐって論戦が繰り広
げられることになる (Ellis, Coulton and Mauger 73)。例えば18世紀中庸
に二種の紅茶に関する論考を著したトーマス・ショートは、紅茶がこの40
年から50年の間（「最下層の者たち」を除いて）あらゆる人々の間に著し
く浸透し、特に「女性たち (the fair Sex)」を魅了してきたにも関わらず、
その普及に見合った考察や理解がなされていないことを懸念するが、彼はこ
うした状況が当時の紅茶をめぐる著しい毀誉褒貶に反映されると考える
(*Dissertation* 3)。ショートによればある者たちは、「万病」の治療や予防
薬として「この異国のもの (this Exotic)」に「最高の効能 (sovereign
Virtue)」を認め、その一方、彼らの褒め殺しに近い「絶賛ぶり」とは対照
的に、紅茶を「遅効性の毒」や「病気の温床 (Seminary of Diseases)」と
称し敵視する者たちは、紅茶が「痛風」、「関節炎」、「リウマチ」、「排尿障
害」などに効果があるのは明白であり反駁の余地は無いとしておきながら、
その作用は主として茶葉よりも「お湯」の効用によるものと抗弁したり、紅
茶の効能を認めつつも、輸入された茶葉に潜む「異国の質の悪い病気」への
感染を危惧したりするという (*Dissertation* 19-20)。

しかしショートにとって「この粗末な灌木 (this humble Shrub)」であ
る紅茶が、英国の商業、交易、国庫、産業、社交そして社会生活に恩恵をも
たらしているのは自明であり、それゆえ彼の論調から読み取れるのは、紅茶

のみならずその商人や輸入業者にまで「上品な耳には衝撃的な言葉」で筆誅を加えようとする、反対論者側の「偏見 (Prejudices)」と「悪意 (Spleen)」に対する不満ということになる (*Dissertation* 3, 20)。ショートの論考は、紅茶の「敵対者」の「ひどい毒舌や誤解」の中「この液汁 (this Liquor)」の汚名を晴らすことにあるのだろうか、総じて紅茶が無害の飲み物であることが力説される論説は、その弊害についてはごく簡単に、紅茶が飲用者の体質や体調及び生活習慣のために、神経系、呼吸器系、消化器系などに軽度の障害を引き起こす事例があることに触れるのみである (*Dissertation* 23, 62-65)。そのため1730年のショートの「学術的紅茶論」は、「多くの興味深い実験」により紅茶の特性を発見することが謳い文句であるものの、結局その趣旨は紅茶に「非常に大きな名声」を与えることになったと指摘されるに至る (Mason 19)。このように評価したのはサイモン・メイスンである。

紅茶の効能に関するショートの見解などを紹介したメイスンは、特にショートの紅茶論について、内容を網羅すれば「ほぼ際限のない」ことになる、紅茶に対する「大絶賛 (great Encomiums)」に他ならないとの所感を抱く (21)。それはメイスンが紅茶を万能薬として売り込む当時の風潮に懐疑的であったためであるが、しかし彼が特に危惧したのは、女性たちの間で行われる「当世の悪行 (modern Depravity)」である「午後の茶会 (Afternoon Tea-drinking)」という慣習についてである (Ellis, Coulton and Mauger 105; Mason 42)。メイスンによれば「午後の茶会」は、「醜聞、侮蔑、陰口、そして不適切な助言」に象徴される、「低俗で悪賢いおしゃべり女性たち」の集まりであり、この「無駄話の集い」には「英国の害毒 (English Bane)」である「飲酒 (Dram-drinking)」がしばしば伴うという (46, 42)。そして特にメイスンは、「魅力的で穢れのない若い」女性たちに対して、こうした集まりに近づかないよう注意を促し、仮に参加すると仮定しても、紅茶の飲用後の疝痛を緩和する「リキュール (Cordial)」として勧められる「ジン」には手を出さないよう警告し、彼女たちの身の破滅を案じている (42-43)。

ただここで看過してはならないのは、メイスンによる風刺的な茶会の心象風景は、貧困層、特に貧しい商人や職工の奥方たちにより興じられる類のものであり、彼が裕福な中間層や上流社会のアフタヌーン・ティーについては等閑視していることである。それはなぜか。そもそもメイスンの紅茶論の趣意は、「節度の無い紅茶の飲用」に対する忠告ということになるが、それは「身分の低い貧乏な人々」に対して意図されたものであり、「この流行の飲み物の贅沢な飲用」によって生活に不都合の生じない「高い身分の富裕層」は対象外ということになるからである(1)。彼に言わせれば、貧困層による午後の紅茶のためのお金や時間の浪費は、彼らの経済状態や社会的境遇の許容範囲を超えた形となり、結果として必ず「当人やその家族に(破滅とは言わないまでも)大きな不利益」をもたらすことになるが、しかしその一方で、「高い身分の暮らし向きの良い」階層には「紅茶を飲みながらの一、二時間」の団欒は、知識や教養を高めるための機会となり有益ですらあるというのだ(Mason 2, 38)。こうした形でメイスンは、茶会という「流行りの習わし (prevalent Custom)」を媒体に、当世の流行に後れまいとし有閑階級の猿真似をする「下層の人々」の虚栄を揶揄嘲笑する(2)。さらに言えば、冷笑的な彼の論調の根底には、紅茶にまつわる浪費により貧困層の多くの家庭が崩壊しているという社会的現実がある(Mason 46)。ただしこの問題がハンウェイのように国家的なレベルで論じられることはない。

Ⅲ：紅茶をめぐるハンウェイの国家論

ハンウェイの『紅茶論』が出版された18世紀の中庸にはすでに紅茶がその飲用への疑義や否定を困難にするほど英国社会に根付いていたようで、このことはショートの1750年の二度目の論考からも窺える(滝口 102)。ショートは其中で、適量の紅茶は、「睡気」、「ものうさ」、「無気力」の予防、「倦怠」や「疲労」の払拭、「気分」の高揚、「記憶力」の改善、「判断力」の強化、「想像力」の刺激に役立つものと結論付け、紅茶の効用を大々的に喧伝することになる(Discourses 76)。紅茶の評価がこうした形である程度定

まる中、ハンウェイは紅茶を「遅効性の毒」と称し、その弛緩作用が「有害物質」の体外への排出を阻害すること、また紅茶が高温で飲用されるため、不眠や虫歯の原因となること、そしてこの「興奮作用のある飲み物」が脳に変調をもたらすため、特に常用者の間で「神経衰弱」の兆候が顕著であることなどを得々と論じるが、その論調はいささか時代錯誤の感を否めない (*Essay* 74, 27, 33, 21, 29-30)。しかしここで強調すべきなのは、ハンウェイにとって紅茶は個々人の身体を蝕む飲み物であるばかりでなく、「国家 (body politic)」にとっても「病」や「衰弱」をもたらすものであり、この問題が彼の『紅茶論』における議論の核心となることである (*Essay* 181)。

ハンウェイは、紅茶は、国の「活力源 (blood)」を枯渇させ、その「中枢 (the nerves)」を衰弱させるとするが、こうした指摘は、紅茶の浪費が金銀の国外流出を招く要因となっていたことを背景とする (*Essay* 182, 173)。ハンウェイの試算に基づけば、一年間で紅茶の輸入のために 300,000 ポンド相当の金銀が国外へ流出しているというが、それではどうして金貨や銀貨の流出が「国家」の一大事となるのか (*Essay* 162)。金銀ほど商取引に有用なものはなく、金銀の裏付けがなければ「信用」や「紙幣」も無価値であるとの認識で、金銀本位の市場経済を理解するハンウェイにとって、各国の金銀の保有量がそれぞれの国富や国威のバロメーターを意味することになるからである (*Essay* 172-73, 177)。だが『紅茶論』において各国の国富や国威の基準とされるのは金銀の保有量だけではない。それにもまして重要視されるのは、ハンウェイが「国力」とほぼ同一視する各国の人口である (*Essay* 321)。彼は、当時の英国の人口を 9,000,000 とする見積りに対し懐疑的で、8,000,000 から 7,500,000 という数字が妥当ではないかとする一方、フランスの人口については、イギリスの倍の 18,000,000 という数字を挙げる (*Hanway, Essay* 321-22)。ハンウェイは、フランス側の主張するこの数字を事実無根とするが、しかし彼が力説するのは、仮にフランスの人口を少なく見積もり 12,000,000 としても、この数は、敵国の膨大な領土を防衛する軍隊を組織するのに十分な数字であり、この状況が紅茶という「遅効性の毒」により年間 2,000 人の命が奪われ、人的「大損失」を被る英国と

対照的であることだ。(Essay 321, 74)。紅茶により金銀が枯渇する中、紅茶とジンの悪循環により英国滅亡という悪夢を抱くハンウェイにとって、「フランスの軛」という脅威は現実味を帯びたものであったのかもしれない (Essay 109-110, 176)。

これまで論じてきた中で、金銀の年間流出量、フランスとの人口比、紅茶による年間死者数の見積もりなど、ハンウェイの提示する様々な数字に言及してきた。こうした統計的データは、ハンウェイが議論における数量的な裏付けの重要性を十分に認識していたことによるが、中には、黄泉の国の人口に関する試算といった、荒唐無稽な憶測と呼べるようなものもみられ、偏執的ともいえる彼の数へのこだわりは、少年時代に帳簿を学んだハンウェイが、その後リスボンでの商人見習いや英国商館勤務を通して感得した商人気質によるものかもしれない (J. S. Taylor, *Jonas Hanway* 137; Pugh 6-7)。ともあれ彼の統計重視の姿勢は、英国商館という「通商目的の方領 (commercial enclave)」で勤務する中、ポルトガルに対する英国の良好な貿易収支とその翳りを目の当たりにして培われた「重商主義的理念 (mercantilist ideas)」に基づくものであり、当時政治算術 (political arithmetic) と呼ばれたものの類ではないだろうか (J. S. Taylor, *Jonas Hanway* 17)。

「政治算術」を国事について「数字により論証する技法」と定義したのはチャールズ・ダベナント (Charles D'Avenant) である (128)。ダベナントが、「この技法の拠り所 (foundation)」を「人口に関する適格な知識 (competent knowledge)」であると規定するのは、「あらゆる国の富み」が「国民の労働と勤労」に依拠するという観点から、人口に関する「正確な認識」が国政には必須と考えるためである (138)。それは具体的には、戦時に徴兵可能な人々の数、「国家」に「労働と勤労」で寄与する人々の数、「国家」には「怠惰で無用」な人々の数、また徴税の対象となる富裕層や中間層、逆に税収の殆ど見込めない貧困層の数などについてであり、政治算術は、殆どの政治経済上の課題をこうした数の問題へと還元する傾向にある (D'Avenant 138-39; McCormick 206-207)。国家を尺度に国民を「非生産

的」対「生産的」、また「好意的」対「離反的」という形で分類し、その比率を提示するが、ただしその人口比率の操作については政府の課題として位置付けることになる (McCormick 207)³。端的に言えば、政治算術とは一種の「社会工学」であり、その意図は、国富や国力に寄与する「勤勉で忠実、そして効果的に配分された人口」を生産したり再生産したりすることにあるといえる (McCormick 206)。

それではハンウェイは、前節で言及したメイスンが浮き彫りにする紅茶と貧困層の問題を、こうした政治算術的な「社会工学」を援用してどのように扱っているのだろうか。『紅茶論』では、「政治算術者たち」の非実用性を揶揄し彼らと距離を置くハンウェイであるが、その10年後に出版された『我が国の若き働き手たちの重要性に関する書簡集』(*Letters on the Importance of the Rising Generation of the Labouring Part of our Fellow Subjects, 1766*)においては、彼らの「算術的例証 (mathematical demonstration)」の重要性を公言する形で活用することになる (*Essay 313; Letters 27*)。次節では『我が国の若き働き手』からのハンウェイの見解に触れることで、貧困層の飲茶の問題をめぐる彼の「社会工学」について考察してみたい。

IV：紅茶とその労働力への弊害

さてハンウェイもメイスン同様、富裕層の紅茶の愛飲については半ば等閑視する形で、紅茶は「庶民 (common mortals)」よりはるかに秀でる「優れた人々」にとって「知性を刺激」し「会話を活性化させる」という「稀有な特性」を有することもあり、紅茶の飲用が「社会の上層の人々」に制限されれば問題は無いと主張する (*Essay 271*)。しかしこれとは対照的に「庶民」の飲茶には手厳しく、ハンウェイは、紅茶の消費に関し英国、特にロンドンほど「庶民」が「度を越えて不節制で放蕩な」ところはないとし、使用人から乞食に至るまで「貧しき人々」がまるで「富裕層」と張り合うように、「遙か彼方の国である中国の産物」が無ければ不満を示す現状について

危惧する (*Essay 72, 264-65*)。序論で触れたビューの評伝でも、ジョンソンのような階層の人々ではなく、「下層民」による飲茶の弊害が『紅茶論』の主題であると主張され、そのためジョンソンの酷評は不当とされるが、ともあれなぜハンウェイは彼らを槍玉に挙げるのか (*Pugh 149-50*)。第2節で論じたメイスンの主張を援用すれば、その理由は、勤労により日々の糧を得なければならない彼らが、その経済状態や社会的境遇を逸脱した形で紅茶の消費にお金や時間を浪費することであろう (*Hanway, Essay 273; Mason 2*)。しかしハンウェイはこの問題をさらに政治算術を用いて国家論のレベルで追及する。

『紅茶論』のほぼ10年後に出版された『我が国の若き働き手たち』の中でハンウェイは、紅茶に関する否定的な見解にほぼ変わりはないとしながら、特に「庶民」をめぐる見方について変化のないことを力説する (*Letters 185*)。ハンウェイがこの論考で問題視するのは、小麦の高騰に不満を募らせながら、「この中毒性の薬 (*infatuating drug*) を飲む午後の楽しみ」という名目で、 $\frac{1}{4}$ オンスの紅茶のために1ポンドのパンの購入をあきらめ、また常用者の中には一日に夕食一回分以上の費用を費やすような形で、しかも彼らの健康への悪影響が必定である不純物のために、生活の糧を乱費する「最下層」のありようである (*Letters 181*)。そしてこの食生活の問題に、紅茶の飲用のための無駄な時間の浪費という「最大規模の悪弊」が加わるとなれば、ハンウェイにとって紅茶の飲用はまさに、貧困層に「重度障害 (*debility*)」をもたらす「異様で不合理な習慣」ということになる (*Letters 181*)。ハンウェイはこの「失費のもと (*article of expence*)」は「国家の繁栄」に反作用するともいうが、この指摘をめぐって紅茶を禁制品とするシナリオを提示し、紅茶の輸入や消費に関わる税収が莫大であることを認めた上で、紅茶による税収が消失し、またそのために税が倍額されとしても、貧民たちが健康な食生活で労働に勤しむことが可能になり、結果的に国の安寧につながると主張する (*Letters 181-82*)。なぜならハンウェイにとって貧困層の存在は、国にとっての「手足」のようなもので、彼らの労働力なしには国の「目や頭」である上流階級や富裕層の存在はあり得ないからである

(*Letters* 164)。そしてハンウェイは、貧困層の雇用手段を確保することが可能であれば、損得を抜きにして、彼らの存在に「金銭的価値 (pecuniary value)」が生じるとし、露骨な形で、一般的な試算では「100 ポンド」と見積もられる彼らの命を「丸々 300 ポンド」と算定している (*Letters* 93-94)。ハンウェイが危惧するのは、まさに「丸々 300 ポンド」の価値のある、ダベナントの言葉を借りれば「国家」に「労働と勤勞」で寄与する人々の喪失である (Hanway, *Letters* 94; D'Avenant 138)。こうした懸念を抱きながら彼は、飲茶の特に貧困層への弊害を力説することで、国富や国力の基盤となる「勤勉で忠実、そして効果的に配分された人口」の構築について政治算術的な「社会学」を用いて提言することになる (McCormick 206)。

さて本稿の第 1 節で論じた『旅日誌』に目を転じれば、その「宗教的隨筆」で「聖職者の役」を務め、「最大の希望の綱」である来世の「永遠の至福」を説くハンウェイの姿が想起されることになろう (*Journal* 315, 143)。しかしこの宗教者としての側面は、『我が国の若き働き手』で貧困層の「金銭的価値」に触れ、また『紅茶論』で飲茶の禁止による人口増加とそれに伴う有益な労働力の増加を謳う、彼の政治算術者としての一面とは、一見したところ整合性を欠くようにも思われる (Hanway, *Letters* 93; *Essay* 186)。そこでヤヌスのように二面性を有する彼の主張を読み解くための手掛かりとして、ハンウェイが携わった当時の慈善活動のありように着目してみたい。というのもそれは「普遍的な人類愛」や弱者への「憐み」だけではなく、「コミュニティの柱」である「勤勉な貧民」の創出という、実利的な側面を持ち合わせていたからだ (金澤 77)。

V：慈善事業の重商主義的価値観

18 世紀の初頭にはすでに救貧税は破格の数字にまで上昇しており、負担を強いられた納税者たちの関心は、数多くの「極貧の人々」の救済に向けられる (Rodgers 3)。そして貧困問題に関して、種々の計画が提案され、

様々なパンフレットが著され、多くの説教がなされ、また多様な慈善団体が設立されるなど、「情感的で道徳的な時代精神」にも支えられ、まさに18世紀は「慈善活動の黄金期」となった (Rodgers 3)。慈善行為の「最も顕著な動機の一つ」について言えば、それは宗教的なもので、この世の罪を贖い来世での救済へと導く、「宗教的实践」としての「慈善行為という原初的な概念」が根強く残っていたが、同様に動機として典型的であったのは、「この世の心配事」からの「逃げ道」として、慈善活動に「感傷性という安らかで幻想的な安息地 (haven)」を求めることであった (Rodgers 7-8)。「永遠の至福」を「最大の希望の綱」するハンウェイの慈善活動も、こうした宗教的また感傷的な動機に基づくものであったのだろう (Journal 143)。しかしこれら宗教的また感傷的な動機に加え、さらに顕著なのは社会的そして政治的な側面であり、18世紀の慈善活動を理解することはその目的の一つである「社会的有用性」への着目なしに不可能であるとも言われる (Rodgers 9; Andrew 6)。慈善を説く聖職者たちの説教も、「主要な宗教上の義務としての慈善の重要性」に言及しつつ、次第に「喜捨 (benevolence)」を求める別の「世俗的な理由」、言い換えればその「社会的実利的な価値」や「公的あるいは私利の利害」について触れるようになる (Andrew 20)。例えば激増する「ロンドンの物乞い」救済を求める説教では、「宗教」上の動機だけでなく、町の「名誉」や「福利」という公利の利害、さらには、町の美観を損なう困窮者たちの排除による快適な生活環境の保証という私利の利害などが強調されたりしたという (Andrew 20-21)。

ここで着目したいのは、「捨て子養育院」や「分娩病院 (Lying-in Hospital)」といった「児童養護」や「分娩」のための慈善施設などの存在である。このように言うのは、これらは18世紀の慈善活動の主要な誘因であった、宗教的また感傷的な動機と「社会的有用性」が象徴的な形で融合したものであり、またハンウェイもこうした事業の運営に積極的に関与していたからでもある (Andrew 71)。そしてこれらの施設の目的はと言えば、乳幼児の命を救いまた出産を促すことで、懸念される「人口減少」に歯止めを掛けることであった (Rodgers 10)。このことは、孤児や捨て子の救済、出産女

性とその子供の養護のみならず、売春婦の更生支援、また婚姻の奨励などに
関与したロンドンの慈善事業者たちの共通目標であり、それは彼らが「国力」と「国富 (national prosperity)」を「人口」と同一視していたことにもよる (Andrew 57, 24)。さらに言えば、慈善事業者たちが「最も効果的で国益となる救済」として目標としたのは「貧困層の雇用」であり、彼らは「労働貧民 (the laboring poor) の生産力」について国を円滑に機能させる「巨大な原動力 (motive force)」とも見做していた (Andrew 42, 23)。そして「政治算術者」とも評される彼らの理念とは「矛盾」しない形で、実利的な傾向を帯びる宗教的指導者たちの説教においても、「慈善活動の主要な目的」として「貧民の有益な雇用」が強調されるようになる (Andrew 22, 20)。このような 18 世紀の慈善活動の複合的な動機をみれば、『旅日誌』における聖職者のようなハンウェイと、『紅茶論』や『我が国の若き働き手』での政治算術者のような彼の在り方が必ずしも矛盾したものではないことが理解されよう。

結 論

ハンウェイが携わった慈善活動は「捨て子養育院」や「分娩病院」ばかりではない。彼が創設者の一人として関与した「海員協会」は水夫養成の場であり、この機関の設立の趣旨は、路頭にさ迷う貧しい青少年に衣食住を提供し彼らに海事訓練を施すことにあった (Pugh 139)。さらには「マグダレン感化院」の活動にも意欲的で、海事協会の女性版であるこの施設は、貧困に喘ぐ若い婦女子を救済し彼女らに職業訓練の場を提供することを目的とした (J. S. Taylor, *Jonas Hanway* 77-78)。海員協会は「貧窮に喘ぐ少年」を「水夫」に、またマグダレン感化院は「売春婦」を立派な「母親」とするという形で、ハンウェイの慈善事業の目的は「国益」への寄与であったと言えるが、しかしこのことによって、「彼の慈善活動」が「人道的でキリスト教的な目的」を欠いていたことにはならない (J. S. Taylor, *Philanthropy* 287-88)。「愛国的で重商主義的な熱意」と「キリスト教的博愛」の複合は、

「慈善活動の黄金期」と呼ばれる時代の風潮であり、ハンウェイもまさにこの時代の象徴的人物であること、言い換えれば、彼の活動の原動力が「愛国心」ばかりでなく「信仰心」にもあったことが、『紅茶論』のみでなく『旅日誌』も合わせ読むことで、裏付けされるからだ (Andrew 59; Rodgers 3, 36)。ハンウェイの慈善活動について議論するにあたり、『旅日誌』に目を向ける所以がここにある。

註

¹ 本稿においては、東洋からの輸入茶葉の名称を紅茶 (black tea) という形で表記するが、その中には緑茶 (green tea) も含まれることを明記しておく。当時英国に輸入された茶葉は、加工工程の発酵の有無によって、紅茶 (black tea) と緑茶とに大別された (角山 53)。18世紀当初は、発酵させない緑茶の輸入量が75パーセント程度を占め圧倒的であったが、その後1720年代頃から緑茶よりも比較的安価な紅茶、特に福建省武夷山を原産とするボヒー茶 (Bohea) の輸入が増大し、1740年代には緑茶の輸入量は僅か30パーセントに留まる (Merritt 23)。

² 政治算術は、その命名者であるウィリアム・ペティー (William Petty) により人口に膾炙し、王政復古からハノーバー朝の創始に至って「黄金期」を迎えるが、この原初的な統計学を代表する二人の人物、グレゴリー・キング (Gregory King) とダベナントの死とともに18世紀初頭少し翳りを見せる (Hoppit 516-17)。けれども「数量的情報」の開示というその手法は、18世紀を通じて軽視されることなく、18世紀半ば、特にジョージ3世 (George III) の即位後、幅広い形で重用されることになる (Hoppit 531)。

³ 政治算術の命名者であるペティーも、人口比率を各種の政治的提言の基軸としたようだが、彼にとって数字の正確さや精度はさして問題ではなく、重要なのは「大雑把で相対的な比率」であり、例えば彼の提示するアイルランドにおけるプロテスタントとカトリックの比率などについて言えば、その数字の精密度よりも「議論の支え (prop)」や「行動を促す拍車 (spur)」という形での数の有用性が強調されたようだ (McCormick 177, 206)。こうした特徴は、ハンウェイが議論のために活用する種々の概数 (round number) においても顕著にみられようか。ともあれ政治算術は一種の政治提言の道具であるためか、提示する統計的データが政治家たちに受容されやすいよう、用いられる計算方法も、「代数学」や「幾何学」などの高等数学ではなく、「足し算」、「引き算」、「掛け算」、「割り算」といった、市井の「商店で用いられる算術 (shop arithmetic)」に基づくものであり、こうした傾向は、商人の家庭に生まれ育った、政治算術の振興者であるキングの影響が少なくないとされる (J. A. Taylor 12, 33)。

引用文献

- Andrew, Donna T. *Philanthropy and Police : London Charity in the Eighteenth Century*. Princeton, NJ : Princeton UP, 1989.
- D'Avenant, Charles. *The Political and Commercial Works*. Vol.1. London, 1771.
- Ellis, Markman, Richard Coulton, and Matthew Mauger. *Empire of Tea : The Asian Leaf That Conquered the World*. London : Reaktion, 2015.
- Hanway, Jonas. *An Essay on Tea*. 2nd ed. London, 1757.
- . *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston upon Thames*. 2nd ed. London, 1757.
- . *Letters on the Importance of the Rising Generation of the Laboring Part of Our Fellow-Subjects*. Vol.2. London, 1766.
- Hoppit, Julian. “Political Arithmetic in Eighteenth-Century England.” *The Economic History Review*. 49.3 (1996) : 516-40.
- Jayne, R. Everett. *Jonas Hanway : Philanthropist, Politician, and Author 1712-1786*. London : Epworth P, 1929.
- Johnson, Samuel. *The Literary Magazine*. 1.7 (1756) : 335-42.
- . *The Major Works*. Ed. Donald Greene. Oxford : Oxford UP, 1984.
- 金澤周作『チャリティの帝国—もうひとつのイギリス近現代史』(岩波書店, 2021年).
- Mason, Simon. *The good and bad Effects of Tea Consider'd*. London, 1745.
- McCormick, Ted. *William Petty and the Ambitions of Political Arithmetic*. Oxford : Oxford UP, 2009.
- Merritt, Jane T. *The Trouble with Tea : The Politics of Consumption in the Eighteenth-Century Global Economy*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 2017.
- Pugh, John. *Remarkable Occurrences in the Life of Jonas Hanway, Esq*. London, 1788. 2nd ed.
- Rappaport, Erika. *A Thirst for Empire : How Tea Shaped the Modern World*. Princeton, NJ : Princeton UP, 2017.
- Rodgers, Betsy. *Cloak of Charity : Studies in Eighteenth-Century Philanthropy*. London : Methuen, 1949.
- Short, Thomas. *Discourses on Tea, Sugar, Milk, Made-Wines, Spirits, Punch, Tobacco, & c*. London, 1750.
- . *A Dissertation upon Tea*. London, 1730.
- 滝口明子『英国紅茶論争』(講談社, 1996年)
- Taylor, James Stephen. *Jonas Hanway : Founder of the Marine Society : Charity and Policy in Eighteenth-Century Britain*. London : Scolar, 1985.
- . “Philanthropy and Empire : Jonas Hanway and the Infant Poor of Lon-

don." *Eighteenth-Century Studies* 12.3 (1979) : 285-305.

Taylor, John A. *British Empiricism and Early Political Economy : Gregory King's 1696 Estimates of National Wealth and Population*. Westport, CT : Praeger, 2005.

角山栄『茶の世界史－緑茶の文化と紅茶の社会』（中央公論新社，1980年）.